

令和7年度秋田県総合政策審議会

第3回 観光・交流部会

(議事要旨)

1 日時 令和7年8月29日（金）午後2時～午後4時

2 場所 秋田地方総合庁舎6階 601会議室

3 出席者（敬称略）

【観光・交流部会委員】

吉澤 清良・・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授

黒川 花子・・・・株式会社千葉旅館 取締役

守屋 奈美・・・・有限会社石孫本店 総務企画・海外担当

豊田 哲也・・・・国際教養大学 中嶋記念図書館長・教授

【専門委員】

芦立 さやか・・・・NPO法人アーツセンターあきた 秋田市文化創造館ディレクター

村上 聖子 ・・・・秋田県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会 幹事長

【県】

観光文化スポーツ部 次長 高島 知行

米田 裕之 ほか関係課長等

4 吉澤部会長あいさつ

●吉澤部会長

昨日、秋田県マーケティング戦略室の主催で県職員の研修会があったというニュースを目にした。マーケティングの強化については、これまで取り上げられていたが、実際に動き出したのだなと思ったところである。記事には、県としてまずは移住・定住、観光の分野にマーケティング手法を導入していきたいとの記載があった。

そうした県の動きも念頭に置きながら、委員の皆様には、是非忌憚のない意見をお願いする。

5 議事

(1) 次期総合計画における観光・交流戦略の推進に係る施策の提言について

●吉澤部会長

これまでの部会において委員の皆様から様々な発言をいただき、それらを基に事務局で提言書（案）を作成しているので、事務局から説明願う。

□大森観光戦略課長

（提言書案の内容等について、資料1を用いて説明。参考資料1～4について説明。）

●吉澤部会長

いくつか共有事項を伝える。まず、案段階ではあるが、項目立ては、現行プランと同様、五つの施策にそれぞれ方向性がぶらさがっている。また、表現は変わっているが、観光、食、文化、スポーツ、交通と大きな軸は変わっていない。

また、マーケティング手法の導入等にも関連してくるかと思うが、各施策について、デジタル技術の活用に関する方向性が設けられている。

まずは改めて強調しておきたいこと、欠けている視点等、様々な観点から意見をもらいたい。施策1 「『心を動かす秋田の観光』の実現」について意見を伺う。

○豊田委員

施策名については、特に意見はない。内容についても、基本的に良いと思うが、文章をもう少し練り込まれたものにする必要がある。

提言(2)の情報発信については、インターネット上の情報発信を強調してほしい。ポスターを大量印刷して県内に掲示しても、インバウンドや国内観光客の誘致にはつながらない。

○黒川委員

今の意見には共感を覚える。イベント等のポスターを宿に貼るよう依頼されることがあるが、情報の伝わる範囲が限定的であり、宿泊客が見ても、場所や日程の関係で参加できないことも多い。他に予算を充てるべきと感じていた。

情報発信の件、提言書案には「差別化を意識して情報発信を行うことが重要である」とある。差別化はとても大事なことだと思うが、差別化する点をどのように見いだしていくのかは大きな課題と感じる。

「心を動かす秋田の観光」というワードは良い。一方で、秋田で観光に関わる人の心が動いていないと、観光客の心を動かすことはできないのではないかということも感じた。YouTube や音声配信で、行って良かった観光地に「白神山地」を挙げた方が、最近だけ

も3人いた。実際にやって良さを体験した方の発信等から、どんなことに魅力を感じたのかリサーチし、情報発信につなげていくという手法も良いのではないか。

○守屋委員

農業や食分野の体験、参加型のお祭りなど、その地域でしかできないローカルな体験についても「アキタファン」や「STAY AKITA」等インターネット上で発信してはどうか。冬季の観光にも力を入れていきたいという話があった。例えば、雪国の暮らし体験ができますよ、といったことを、インターネット上に載せれば、日本、外国も含めてだが、それを求めてくる方も少なからずいるのではないか。

県の観光サイトである「アキタファン」や「STAY AKITA」の情報は、常に更新し最新の情報を検索できるようにしてほしい。

○芦立委員

今後、提言をまとめるにあたって、具体的な数値目標等を設定する予定はあるか。

○大森観光戦略課長

数値目標は今後、総合計画本体を作成するにあたって設定することとなっている。数値目標設定の際に注意すべき点等、この場で御意見があれば、伺いたい。

○芦立委員

例えば、「稼ぐ観光エリアの形成」に向け、造成するコンテンツ数や人材確保の状況など、どのような数値目標を設定し、目指していくのかというイメージが漠然としか分からなかつたため確認であった。今後検討予定とのことで、適宜共有してほしい。

提言書案に「多様なニーズに対応する」とあるが、多様なニーズに対応したコンテンツやサービスを提供するには、AIや一般的なマーケティング手法だけでは対応しきれない部分があるのではないか。そうした分野にはそれぞれの専門家が必要であり、専門家とどのようにつながり、かかわってもらうかを検討すべきである。

○村上委員

食やスポーツ、文化にもかかわる部分であるが、次世代の育成については、どの部会に属するのか。例えば、食であれば、今後ブランド化を推進していった後の秋田の食の継承や、人材の定着の部分について、提言書案には記載が無いように思える。人口減少が進む秋田においては、技術や文化をつないでいくということが非常に重要であり、提言書案の中でも示唆してほしい。

四季が明確であることは秋田の観光の強みであり、年間通して楽しめる秋田をPRしていくことについても、提言書案の中で触れてはどうか。

秋田県や市町村が提携している海外の姉妹都市等の学校との交流を通じて、子どもたちが海外でその土地の文化を学び、持ち帰る経験は、将来的に潜在的顧客層へつながる可能性を秘めている。このような早期からの交流文化が醸成されれば、秋田の魅力を長期的に国内外に発信するうえで、重要な基盤になるのではないか。

●吉澤部会長

最後の姉妹都市などの交流というところは、観光や文化、スポーツ等にまたがる内容だと思う。人材育成に関して、所管する部会について事務局から説明はあるか。

○米田観光文化スポーツ部次長

計画全体の骨子の中で、本県の豊かさや人づくりの土壌を次の世代に引き継いでいくことは、県全体の課題であり、未来創造・地域社会部会や教育・人づくり部会の所管となるところではあるが、個別の食やスポーツ、文化等の分野における人材育成等については本部会において是非、提言いただきたい。

●吉澤部会長

これまでの部会で、秋田には既に良い観光素材がある中で、情報発信力の弱さや旅行者へ情報が届いていないといった議論が多くあったと記憶している。

やはりインターネット上での情報発信の強化の必要性は強調したいところである。ただ、情報発信のツールは、ほかにもあるため、マーケティングの観点から、各媒体の特性に応じた戦略を考えていってもらいたい。

他部会からの意見について先ほど説明があったが、白神山地を活用した観光需要の掘り起こしについてはこれまでの部会でも、議論しているところであり、対応できていると理解している。

これから文章を推敲していくことになると思うが、背景と提言が対応するように整理した方が良い。また、方向性の並びとしては、例えば情報発信系が方向性2、4、5と並んでいる。その間の方向性3にコンテンツが入ってくるため、この情報発信を三つに書き分けるのであれば、並べておいた方が全体の整理がしやすい。

それでは、施策2「『あきたの美酒・美食』のブランド化と販路拡大」について意見を伺う。

○守屋委員

輸出に関して、記載を追加するとすれば、容器包装系の対応支援である。海外では脱プラスチックが進んでおり、容器に関して規制が非常に厳しくなっている。弊社でも、EUへの輸出を検討しているが、現在容器に使用しているプラスチックの規制に関する手続きを求められている。今後、様々な事業者が輸出にチャレンジするとなったときに、容器包装等に関する支援やアドバイスも必要になってくるのではないか。

秋田の食の発信による関係人口の増加、販売促進に関しては、県内のほか、アンテナショップをはじめ、県外で事業者が販売する販売会の開催等の機会を増やしていくといつてほしい。また、秋田県内の食のイベントについては、例えば大館のきりたんぽ祭りや、うどんエキスポなど、集客力が高いものについては、県外、国外まで、情報をより幅広く展開してはどうか。

○芦立委員

海外の方へ、秋田のお土産を持って行こうと選んでいたとき、瓶詰めのものや、運びにくいもの、重いものが多い印象を受けた。お土産については、運びやすさや個別包装といったところも重要かと思う。また、海外の方にも喜んでもらえるよう、例えばハラルへ対応していること等の情報をパッケージ等へ明記し伝えることは、今後の販路の拡大に役立てるポイントになるのではないか。

●吉澤部会長

秋田のお土産では大量に梱包されていることが多いが、少量で買いやすいサイズのものがあっても良い。そういうことも含め、食分野とデザインの関係で意見はあるか。

○芦立委員

秋田県でも、様々スタートアップ支援等の施策等があり、新たな感覚や感性を取り込む機会は作られている。例えば、そういう機会を活用し、販路の拡大に向けて何か一緒に取り組む機会を作る、といったことがあれば良いのではないか。

○黒川委員

やはり先ほどから話に出ているとおり、土産品が重く、持ち運びに向かないというのは私も感じている。稲庭うどん等も、小さめのサイズのものを買っても、かなりの重みになってしまう。

提言の(1)について「商品開発に意欲がある事業者同士の交流によるコラボレーションを促す」という記載がある。一方で、(1)の方向性の名称は「競争力の強化」となっており、個人的には競争していくよりも、事業者同士で協力していく方が大切に思えた。「きょうそう」であれば「共に創る」という意味で「共創」も良いのではないか。

○豊田委員

第1回産業・雇用部会の議事要旨の中で、大仙市で秋田の産品の海外へのプロモーションの仕事をしている株式会社ドレッシング・エーの伊藤委員が「農産物、伝統工芸などそれぞれの部会で、それぞれ計画を立てて発信している印象があるため、県で一つ大きなプロジェクトみたいなものを作つて「オール秋田」で海外に売り込むようなことを考えないといけない」という話をされていた。そのとおりだと思う。一方で、オール秋田で、何千

万円と費用をかけて現地へプロモーションしに行っても、あまり効果は見込めない。

やはり、インターネット上で、オール秋田で発信し、売り込んでいきたい。既に「千彩万食」という非常に魅力的なウェブサイトがある。サイト内のコンテンツの内、一部でも英訳し、稲庭うどんや日本酒をはじめとする秋田のキラーコンテンツの情報が海外へ届けられるようにしてほしい。

提言としては、「千彩万食のサイト上の情報を部分的に英訳し、主な県産品についてはネット上に英語で質の高い情報が存在する状況を実現する」という文言を入れてほしい。

□佐藤食のあきた推進課長

今年度、デジタルカタログを作成する事業がある。JETROが運営するオンラインカタログサイトに日本の輸出商材が掲載されているが、その中の県内企業と商品の情報を取り込み、「千彩万食」上で英語版のページを表示できるようにする予定である。

○豊田委員

承知した。是非、進めてほしい。加えて、提言(3)へ、新商品開発への若い県民の参加に関する提言を追加したい。例えば文言としては「秋田の文化や歴史の魅力と合わせ、食の魅力をグローバルなコンテクストの中で考える機会を小中学生、高校生に提供すべき」など。

小学校、中学校の総合の時間などにおいて、秋田県産品の良さ、他県との差異、東アジアにおける発酵文化の中で、秋田が歴史的にどういう位置になるのか等を知ることで、秋田の食や発酵文化、その担い手に興味をもつきっかけになる。10年後、20年後の競争力強化に大きく寄与する取組と考える。

●吉澤部会長

次に施策3「文化芸術が紡ぐ彩り豊かな秋田の創出」について伺う。

○芦立委員

県はミルハスだけではなく、美術館など多様な施設を有している。それらも交流促進に寄与するものである。

県立美術館と秋田市の千秋美術館が共同で企画した展覧会において、秋田市文化創造館も協力し、中心市街地の施設と連携して市民向けのイベントや広報プロジェクトを実施した。この経験を踏まえ、今後は県の施設や各市町村の施設との連携を深めた活動が更に促進されることを期待している。

人材の育成については、大きな課題と感じる。アーティストをはじめとする「プレイヤー」の育成だけでなく、マネジメントやマーケティング、PR等の面からプレイヤーを支援する方の育成機会も必要であると考える。

●吉澤部会長

県内には、市の観光施設、市町村の施設もある。それらとの連携についても読み取れるような記載とすべきである。

○芦立委員

食のPRにもつながる話だが、秋田の文化や民俗文化は海外から非常に熱い視線を集めているため、文化芸術の魅力発信においては、Instagramにおけるタグ付けや、多言語での発信などを意識してほしい。

○豊田委員

タグチアートコレクションに足を運んだ際、中国から来ている観光客風の家族を見た。子ども連れであった。やはり、日本の中で秋田を選んで来るような観光客は文化的な要求水準も高い方だと思う。観光のほか、子どもの教育という観点からも、芸術文化に触れる機会創出に関する活動を推進する事業は必要であり、また、それが実現した際には、それを最大限生かしていくことが重要だと強く感じた。

●吉澤部会長

前回も述べたが、文化振興というところは第一義的にはやはり県民向けの政策であろうと思う。ただ、中長期的にそれを行っていくことで、次の世代の観光資源の創出や秋田のイメージアップにつながっていくため、観光という観点からも大切な分野と理解している。

次に施策4「誇りと賑わい溢れる『スポーツ立県あきた』の実現」について意見を伺う。

○村上委員

スポーツ立県あきたの実現において最も重要な課題は、働く世代や子育て世代のスポーツ振興に留まらず、県民の健康増進、長寿化、そして健康日本一を目指すという本質的な理解を深めることである。

現在の問題点としては、少子化に伴うスポーツ指導者の高齢化や、スポーツをしたい子どもたちの県外流出が挙げられており、彼らを秋田に留めるための対策が必要である。

提言書案の「スポーツを支える組織の充実、人材の確保・育成」に「教育部門との連携を図る」という文言が盛り込まれており、良いと感じた。先日新聞で、スポーツ庁が小学校の体育の先生を部活の指導者とするモデルを展開するという話が載っていた。これから先の子どもたちのためには、スポーツだけでなく、教育のあり方も変わっていく必要があると考える。

秋田県は20年以上前、各市町村に総合型スポーツクラブを設置し全国1位となったことがある。今後の「スポーツ立県あきた」の展開としては、地域との連携を重視し、3年

後、5年後の人ロ・子どもの減少といった社会情勢の変化に対応した施策が進められることを期待する。

湯沢市での台湾とのバスケットボール交流のように、海外からの訪問者、特に子どもたちに秋田の魅力をPRする機会を増やし、帰国後もその魅力を発信してもらうことで、スポーツ以外の分野も含めた交流人口の増加を図るべきと考える。

先日新聞に、愛知県の若い世代の政策提言が載っていた。スポーツに限らず、文化や食も含め、今後を担っていく20代、30代の若年層からの意見を積極的に吸い上げる取組、体制づくりが必要である。

○豊田委員

秋田県のスポーツ振興政策については、県民の健康増進とスポーツ選手の育成・交流人口拡大という二つの考え方が競合している。現在、「全国や世界を見据えた競技力の向上」という項目があるものの、その内容は健康増進に関するものであり、項目名と実態が合っていないように思える。

提言としては、「世界に通用するトップを育てる」という部分は提言書案からは外し、生涯を通じた健康や運動能力の向上を政策の中心に据えるべきである。秋田県は東京と異なり、体を動かせる場所が豊富であり、その環境を生かすべきだ。また、小学校・中学校の教育においても、生涯を通じて体を動かすことの重要性をしっかりと教えるべきである。

●吉澤部会長

村上委員と豊田委員から、健康増進、教育分野との連携強化について発言があった。本部会の領域としては、「スポーツを通じた地域づくり」になるかと思う。

村上委員から、海外の都市とのスポーツ交流について言及があった。観光交流の効果としては、相互理解等にもつながる部分である。提言書を取りまとめる際には、適宜、教育・人づくり部会等との調整をしていく。

○芦立委員

私は秋田県立中央公園フィールドアスレチックセンターが大好きだ。県の施設として、低価格で、広く、様々なアクティビティを体験できる施設があるというのは、観光や住みやすさという観点で大きな意味を持つと思う。

行く度に、少しづつ利用できない場所が増えてきて不安を覚えているが、秋田の広い土地と自然があってこそ実現できた施設だと思う。こういった施設があることを秋田の魅力として、打ち出していってほしい。

秋田市が「ウォーカブルな街づくり」という施策を打ち出している。健康増進にもつながる取組である。歩きたいと思わせる魅力づくりという点で、秋田市に限らず、県と市町村で連携できる部分があるのではないか。

○豊田委員

フィールドアスレチックセンターは素晴らしい施設である。様々なアクティビティを体験できる場所であるが、昨今のクマ出没の問題で利用できない場所もある。クマの問題はこういったところにも影響するため、クマ対策については是非、お願いしたい。

○黒川委員

クマは今やどこに出没するか分からず、近所を散歩するにも危険を感じるという点で、運動や健康づくりにも影響する問題だと思う。難しい問題であるが引き続き対応をお願いしたい。

先日、こまちスタジアムへ甲子園予選の鹿角高校の試合を観にいった。私は野球に詳しくないが、大変楽しめた。今年一番の思い出になった。観客を見ていて、スポーツ大会の開催が関係人口の増加につながることを実感した。スポーツ大会の誘致については、今後も継続していってほしい。

●吉澤部会長

クマの出没増加は本当に大きな問題だ。私は来週、学生と北海道で森林散策を行う予定であったが、クマとの遭遇を避けるため、代替プログラムを検討しているところだ。秋田県の観光コンテンツにおいても、クマの出没が増加した際の、様々な代替プログラムを考える必要があるのではないだろうか。

施策5は「暮らしを支える交通ネットワークの構築」である。他の部会からの意見も挙がってきてているが、当部会で議論している内容であり、対応できていると理解している。改めて強調しておきたいこと等あるか。

○豊田委員

細かいことだが、1点目の「住民が利用しやすい地域公共交通ネットワークの形成」の提言の中で、高齢者の移動の問題だとか、小学校や高校の地域の足の問題にも触れてはどうか。加えて、少し気になるのは、「車を持っていなくても生活できることを目指す」という部分である。特に秋田市においては、現状、車を持っていなくても生活できる状態にあると考える。車を持っていなくても生活できる秋田を「維持すべき」という記載に変更してはどうか。

教育・人づくり部会の議事要旨を見たところ、秋田県PTA連合会長の清水委員が自転車利用の促進について言及していた。

施策の方向性がすでに六つあるが、七つ目として「自転車利用の推進」のような項目を設けてはどうか。今秋田市でも自転車通行帯の道路上の表示について議論されているほか、国でも自転車の利用についてのルールが明確化してきている状況にある。記載例としては、「自転車をその地域の政策の中でしっかりと位置づけ、自転車利用環境を充実させる取組を促す必要がある」など、国土交通省の指摘も踏まえ、交通弱者や歩行者、自転車利用者が安心して生活できるカーボンフリーな社会の実現を目指すという視点もほしい。

カーボンフリーに関連して、秋田県庁や秋田市役所は、早い段階から自転車での通勤を促進する取組をしており、自転車通勤している方向けの通勤手当がある。環境省関連機関の研究では、自転車で通勤する人は、自動車通勤する人と比べ、生涯に排出する量が約半分というデータもある。

カーボンフリーな社会を目指すなら、公共交通の利用を促すとともに、交通弱者が安心して生活できるカーボンフリーな社会を実現することを、提言に加えてほしい。すぐに実現するものではないが、将来、予算要求や事業を構築する際に手がかりにしてほしい。

●吉澤部会長

観光と自転車というところでいくと、サイクルツーリズムというものもあり、魅力的なコンテンツになっている。自転車は、スポーツ、交通、観光と様々な分野に関わってくるところである。記載する部分については今後の調整で検討していく。

ほかにその交通の関係についていかがだろうか。例えば6ページの(3)だが、「幹線鉄道の整備促進」とありながら、フェリーに関する記載しかない。幹線鉄道は秋田新幹線を指しているかと思うが、追加すべき意見等あるか。

○村上委員

東北中央自動車道の横堀道路が今年度中に山形方面へ通じることで、物流の拡大や観光誘客の促進につながる可能性があり、大きく期待している。新幹線だけでなく高速道路の整備も流通の拡大と経済活性化に不可欠であり、改めて積極的な取組を要望する。

○豊田委員

構成の話になるが、施策の方向性が少し多いように感じる。例えば 方向性(2)と(3)を一緒にするなど、検討してみてはどうか。

●吉澤部会長

交通ネットワークの整備拡充というところは、日常利用と災害対策が第一であり、観光ではそれを二次的に利用している。まず県民の生活と産業の円滑な運営を維持していくことが、この分野の大きな役割になっていると考える。

施策1から5まで意見を伺った。全体を通して追加等あるか。

○守屋委員

地域課題解決に、ライドシェアについて是非実現してほしいと思っている。どの地域で、いつまでに実装するなどといったビジョンはあるか。

○鶴岡交通政策課長

秋田県では地域公共交通再構築のプロセスの中で、地域毎にライドシェアも含めた検討が進められている。具体的には、既存のタクシーやバスが運行していない、または確保が困難な地域においては、地域住民による公共ライドシェアの検討が行われている。一方で、既存のタクシー事業者がサービスを提供している地域では、繁忙時間帯に日本版ライドシェアとして一部運行されている。

大阪府で実施しているようなタクシー不足を背景とした大幅な規制緩和を伴うライドシェアという意味では、県内では実施されていないが、国の動きなどを見極めつつ、現行の規制の範囲内で可能な取組を進めていく。

○豊田委員

ライドシェアに関する国の政策は、迷走しているといわざるを得ない。国のライドシェア導入の試みへの参画については、慎重に判断するべきである。タクシーは「究極のライドシェア」であり、タクシー事業者がサービスを提供している地域においては、既存のタクシー事業者を支援し、配車アプリを有効活用することが最適解と考える。

一方で、自動運転技術の進展には、可能性を感じている。現行の提言書に含める必要はないものの、国の政策や動きを注視し、秋田県でもできることは積極的に取り組むべきである。

●吉澤部会長

別府市ではライドシェアを試行しており、主に外国人観光客が比較的高価なライドシェアを利用することで、タクシー不足が緩和され、地域住民が通常のタクシーを利用しやすくなるという「棲み分け」効果が期待されている。今後、様々な事例が出てくると思うが、ライドシェア、自動運転については状況を注視していくほしい。そういう意味でも、提言書に加えて良いのではないかと思う。

○芦立委員

観光分野については、県外からどのように誘客するかということに意識が向いてしまうが、やはり秋田に住んでいる人たちがどれだけ幸せに、充実して生きていけるかという点が重要である。その様子が伝わることによって、県外にも秋田の良さが広まっていけば良いと思う。

先日、子どもが利用できるプールを探したところ、秋田市内だと二つしか見つけられなかつた。そのうち、県立プールは大会等により利用できないことも多い。プールに限った話ではないが、交流人口拡大のため、大会等を誘致することも重要である一方、県民がスポーツを楽しめる環境を保つことも必要であり、そのバランスが重要である。そういうところも含めて、県民が豊かに暮らせる状況をどう作っていけるか、ということも踏まえた提言書としたい。

●吉澤部会長

観光分野だと「住んでよし、訪れてよし」というフレーズがある。まずは住民が幸せに生活するというのは、非常に大切な観点であるため、そういったところを前提としながら、学校交流、スポーツ交流による振興について考えていく必要がある。

○豊田委員

プールに関連して、秋田駅からスキー場までは、バスを利用して 40 分で行くことができる。車を運転せずとも、ウインタースポーツを体験できるというのは大変魅力に感じるため、交通分野にも関わるが、そういった環境は維持していってほしい。

●吉澤部会長

先ほど、スポーツ関連で「健康増進」の話題になった。健康増進や予防という部分については、他の部会でも話し合われていることかと思うがどうか。

○米田観光文化スポーツ部次長

次期総合計画において、「健康・医療・福祉」は政策 5 に位置づけられ、「誰もが健康的に自分らしく暮らせる社会を実現する」ことを目指している。この目標に向け、県民のヘルスリテラシー向上等については健康づくり推進課等が担当し、普及活動や健康応援などの取組を実施している。

スポーツ分野においては、健康との関連性をどのように整理し、取り組んでいくべきか、健康・医療・福祉部会等と調整を図りながら、連携を図っていく。

具体的な施設運営の課題として、プールの事例が挙げられた。現在工事中のシルバーエリアが完成すればプールが利用可能となる見込みである。秋田県は他県に比べてプールの数が少ない傾向にあるが、水管理には多大な経費がかかり、人口減少も考慮すると、県レベルでの施設規模の検討が必要とされているところである。

●吉澤部会長

スポーツ振興や健康増進といったことは、様々な部会にまたがるものだと思う。すべての部会での提言書をまとめたときに、スポーツの健康増進の面、誘客の面、それぞれが網羅されていることが大切である。

私は最近、観光財源の委員になることが多いため、改めて伺う。観光財源、宿泊税について、検討する自治体が増えてきている。宿泊税導入には、様々なメリット、デメリットがあるが、観光財源の必要性について、念頭に置いておく必要があるのではないか。秋田県の状況を伺いたい。

○大森観光戦略課長

昨年、県議会から宿泊税に関する質問があった際、知事は、秋田県にはオーバーツーリズムの問題がないため、課税を行うのではなく、観光客を誘致するための施設整備を優先すべきであるとの見解を示している。現時点においても、宿泊税の具体的な検討を行う段階ではないという認識を維持しているが、県内においても、検討段階にある市町村は存在しており、県内外の状況を注視している。

●吉澤部会長

今回の提言に入れることは考えていないが、宿泊税については全国で議論されており、今後も情報収集していってほしい。

○豊田委員

秋田には、日本一を目指せるような最高のコンテンツがあるが、その情報発信が不足している。例として、昨年度、森吉山阿仁スキー場はインターネット上で話題になったことで、外国人が押し寄せ、賑わい、オーバーツーリズムに近い状態になった。秋田は国際的に競争力のある優れた観光コンテンツを複数有しており、インターネットでの情報発信を適切に行えば、収益性の高い観光ビジネスが実現できると考えられる。広報と連携し、情報発信の強化に努めるべきである。

●吉澤部会長

終了時間が近づいてきた。提言書案については、本日の意見を踏まえて事務局にて作成する。委員の皆様には後日、確認依頼等により意見をいただくため協力を依頼する。

最終の提言については、10月の第2回総合政策審議会までに最終的な取りまとめを行う。最終調整は、私に一任いただきたいと思うが、よろしいか。

(委員一同：賛同)

最後に、議題2、その他として、委員の皆様、事務局から連絡事項はあるか。

○高島観光文化スポーツ部次長

事務連絡ではないが、インターネット上の情報の充実について、「心を動かす秋田の観光」という施策名にしたことも含めて説明したい。「心を動かす秋田の観光」という施策名は、豊田委員から提案された「行ってみたい秋田」のように旅前の誘客を促す視点と、来訪後の感動体験といった、旅前と来訪後の両側面を強く意識して設定している。

特に、インターネット上で情報発信の充実を重視しており、海外の人々へ秋田県の魅力が届くよう、SNSなどを活用した効果的な情報伝達が必要と考えている。例えば1枚の写真がきっかけで秋田を訪れるといった行動変容を促すことも、「心を動かす」という施策名に込められた意図である。このようなインバウンド向けの情報発信強化は、次期総

合計画において重点的に推進していきたいと考えている。

○豊田委員

よろしくお願ひする。

●吉澤部会長

観光誘客においては、「行ってみたい」という旅前の動機付けと、来訪後の「感動」という両側面が重要である。施策名の意図について、今の説明がとても分かりやすかった。来訪者が感動する体験、さらには観光業者の心を動かすといった、旅前と旅後の両側面を強く意識するという考え方を提言書の中でも明記してもいいかもしれない。

【閉会】